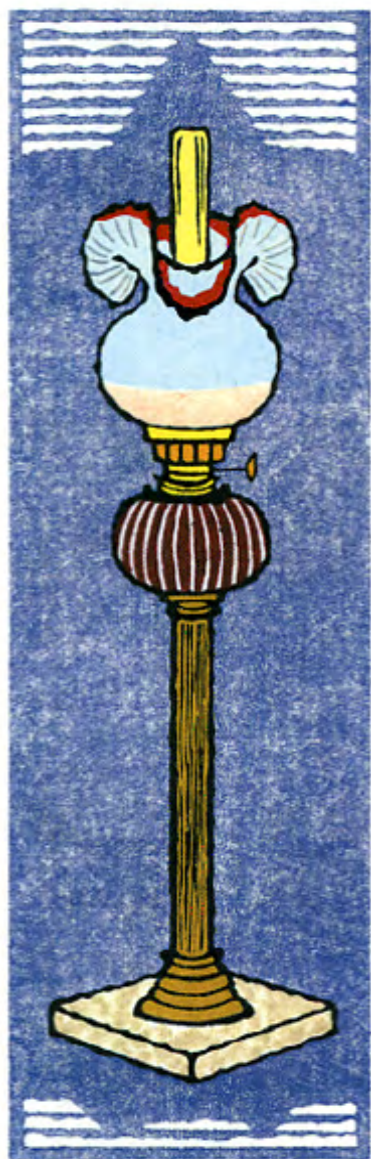


# 春燈

2月号

February 2018



主宰の句

安立公彦

大井川秋ゆく雲を浮かべけり

乱れなき明日への歩み冬日燦

(神田恵琳さんへ)

青空にひと日の贅や枇杷の花

暮れのこる静けさにあり木守柿

落葉して木々は眠りに入りにけり



久保田万太郎の句

月つひに落ちてしまへり涼み船

「春燈」昭和二十九年

掲出句の短冊は唯一私蔵しているもの。この句は、万太郎先生六十五歳の作品で、運座の仲間と大川に船を浮かべ涼を楽しまれている様子がリアルに描写され句中の「つひに」の副詞が限りなく余情を深めている。即興的な抒情詩の至芸で、上品な艶が先生の人となりを彷彿とさせる。その折の作品に「落ちがたの月のいろみよ涼み船」が、昭和二十九年の春燈誌に掲載されている。

鈴木鳳来

久保田万太郎の句

何がうそで何がほんとの露まろぶ

「春燈」昭和三十年

前書に仲間の死を悼むやさしい言葉があるが、これは森羅万象全てに向けた限りなく大きい句に思える。

大方の人は、学童期を過ぎると、迷い、考え、悩み、疑い、「本物探し」の果てしない旅を続ける。時には、それに殉ずる人さえある。自分の容姿の「実像」が自分の肉眼では掴めない様に、それは永遠なのであろうか。

「露まろぶ」が小さく、はかなく、やるせない。

白神知恵子

# 燈下集



○ 神の留守稜線白き県境

世話焼きの妻うとましや風邪籠

染料の残りし爪や障子貼る

待合はず雷門の師走かな

阿弥陀像冬木の影を袈裟懸けに

○ 豊谷青峰

○ 高埜良子

霜晴や声のここまで朝稽古

おでん煮ゆ訪問介護予定表

酉の市善男善女絵馬の文字

二の酉や黄昏どきの屋台混む

手に触れておかめ笑む面熊手撰る

○ 三代川玲子

鳥声の疎林抜けゆく小春かな

鈍、ナイフ冬の光を陳列す

幽かとは日なたに跳べる冬の虫

枯園に湧水いとまなかりけり

冬すすきひとは川よりひくく住み

○ 吉川隆

はかどりし夜なべの後の酒の味

般若面神在月の息を吐く

立ち読みの冬ぬくぬくと書店かな

干し物の影が冬日に踊りけり

日燦々蒲団に稚の匂ひかな

○ 本田 保

悪智慧を働かしぬてそぞろ寒

冷やかやどうにもならぬ貧富の差

芸術に魅せられてゐる文化の日

毎日が努力努力や秋深し

冬に入る心ひきしめ掛からねば

○ 瀬戸 峰子

縛られて白菜日毎太りけり

銀杏黄葉「冬ソナ通り」黄の絨毯

掃き跡へ跡へと落葉駆け来る

かいつぶり水面の穴をくぐるかに

夜寒さに「石やきいも」の声流る

○ 棗 怜子

一茶忌や筆遅々として悔み状

蓮華坐の膝に辿りし冬の蝶

コンサートの切符届きて小六月

遠き日の恋の疼きや散紅葉

抱かるるを嫌ふ三毛猫漱石忌

○ 北岸 邸子

広告灯川面にゆらぐ雁渡

廃校跡色無き風の吹くばかり

介護認定審査を待てる小春かな

椅子のむき替へて小春日眩しめり

此処だけの話のぼつむ小春かな

○ 今井 弘雄

マヌカンの仮面の笑みや十二月

かすかなる日差の影や枯芙蓉

小夜更けて冴えのしづまる星の空

着ぶくれて順番を待つくじ売場

歳末の野に手をつなぐ塞の神

○ 竹内 慶子

身構へるほどのことなく冬立ちぬ

着ぶくれて気儘なふたり暮しかな

行くところ有る日の夫や冬帽子

冬空に似合はぬダリア仰ぎけり

熱爛に居ずまひ正す女かな

# 当月集

安立 公彦選



○ 藤原若菜

あけゆくやきらの冬日のおだやかに 祝小鳥集

紅白の山茶花散らふ屋敷町

初霜や肺腑に満たす今朝の息

七宝の古りたる艶や冬はじめ

茶の花にとほき人ごゑ一葉忌

○ 篠原幸子

山の日を集めて一枝帰り花

岩を抱く枯蔦終の紅を秘む

千の風となりし知らせや散紅葉

さざんくわの真紅の垣根咲き継げり

老大樹にいただく力十二月

○ 市川玲子

遠富士を凜と透かして冬木立

病床に写経の翁冬日和

憂きことは空の彼方へ年送る

夕日照る色を尽くしし冬薔薇

道普請の大穴覗く十二月

○ 大文字孝一

神宿る湖深閑と冬に入る (摩周湖)

冬菊や母の忌近き母の部屋

ひやかしも賑はひとり西の市

大き夢まづは小さき熊手かな

逢引は古語となりしか冬紅葉

○ 和田絢子

小春の日たしかめてをり鯉の口

ふるさとを久しく訪はず菊日和

冬コスモスひと恋しくて枝垂れけり

義士祭間近撞かざる鐘楼浄めらる

木枯一号子を抱く母の腕力

# 春燈の句

安立 公彦選

英訳の般若心経文化の日

わが胸に紅葉かつ散る山家晴

手になじむ陶土の湿り今朝の冬

懸大根見えぬて家郷には寄らず

木洩日を右に左に冬のバス

忙中閑小春日を浴び過ごしけり

下町に古き馬刺し屋酉の市

新のりと筆太の旗安房の町

風呂吹や傘寿の先を透し見る

煮凝や仲直りへの予感秘め

我も古い妻も老いたる年忘

街蔽ふ聖樹電飾首都バンコク

いざ熱き珈琲飲みてうた詠まむ

寒暁や目覚しいらず今日も起き

神奈川 石田 康明

千葉 大湊 栄子

バンコク 大口 堂遊

東京 原田 小芝

冬の朝新聞の音床に聞き

子の叫び無視する母や冬の夜

見えてゐて大江嶺遠し柿熟るる

冬月に温もりほしや隠れ里

山裾を走る芒の白き風

枯葉散る風の荒息神の留守

雲よりも白き月影秋深む

山茶花やひそと商ふ門前町

茶の花や浅き流れに魚の影

自転車を下りて語らふ冬ぬくし

菊膾せよと届きし荷の湿り

鳶の眸の頭上をかすめ黄葉寺 (長谷寺)

着ぶくれて昭和の顔となりにけり

座布団は母の遺愛や紬織

京都 曾根 京子

千葉 小淵二美江

千葉 廣瀬 克子





# 余言

安立公彦

あるところだけを灯して咳ひとつ

近藤 牧男

俳句にとって抒情の大切さは言うまでもないこと。俳句は抒情に支えられていると言っても良い。その支点のぐらついた句は徒事俳句に墮する。もとより抒情の表現は単一ではない。作者の俳句はその抒情を可能な限り単純化しようとする。〈こんなにもさくらが咲いてゐて静か〉などはその最たる句と言っても良い。

掲出の句、例えば書齋の机辺だけを灯して原稿に向かう作者。静かな初冬の町は、更けゆく夜とともに物言一つしない。その中で時折もらす「咳」の音。しかし作者はその咳ひとつに立ち止まることなく机に向かっていている。この句、その「咳ひとつ」に千金の重みを感じられる。

波郷忌や鴨来るころの小名木川

三宅 文子

石田波郷が亡くなったのは、昭和四十四年十一月二十一日、まだ五十六歳だった。小名木川は芭蕉も詠んでいる。〈川上とこの川しもや月の友〉。《続猿蓑》波郷自身も戦後進開橋上に立ち、〈百方の焼けて年逝く小名木川〉と詠み、百方焼野原の景を、「私の焦土諷詠のはじまる日であった」と書いている。この頃波郷は江東区北砂町に住む。

三宅さんの句は、「波郷忌」と「小名木川」という詠い尽された取り合せを、「鴨来るころの」という絶妙の中七で中

夫の文小春の椅子に読みかへす

鷹崎由未子

普通にこの句を鑑賞すると、転勤中の「夫」の手紙を小春日の椅子に読み返しているという、心安らぐ景となる。しかしこの夫は「亡き夫」である。そういう作者の身辺を知る者にとつて、この句は単一の映像でなく、幾つもの映像の重なりを見るような気持ちがある。その映像の一つには、へまだそこに夫の寛ぐ藤寝椅子の景もある。

掲出句、大切に仕舞っている夫君の手紙を、小春日の居間で読み返す作者。そこには作者と亡き夫君との掛替えのない交歓の一時がある。それは誰も這入り込むことの出来ない時間である。作者はそれを淡々と表現する。その淡々さが却つてこの句を見る人に深い感動を与える。「椅子」が脇役の役を良く果している。

和し、みごとな一句に仕立てている。

秋灯や鏡の顔の他人めく

小泉 三枝

人は誰も自分の顔を直接見ることは出来ない。鏡や写真で見ると自分の顔は鏡、写真という仲介物を立ててのこと。しかし私たちはそのことに何の不都合さも感じない。

或る夜作者は鏡に写る自分の顔を見て、違つ、と小さく叫ぶ。これは私の顔ではない、しかし鏡に写る顔はいつもの顔なのだ。違つと思つたのはその瞬間の心の揺れだ。その揺れは日常くり返されるが、偶然鏡を前にした瞬間と心の揺れが合っただけのこと。人というもののミステリー性を良く引き出している。「秋灯」故更に効果は大きい。

落葉踏み用のありげに鳩寄り来

太田佳代子

最近雀や尾長の姿を見なくなつた。数年前までは、庭に出ると芝生の雀が舞い翔つたものだが、今は雀も来ない。仲夏、庭隅で鳴いていた雨蛙も見なくなつた。

この句、公園の景か。ベンチに休んでいると、一羽の鳩が近づいてくる。その様が如何にも用あり気に見えた、というのが面白い。しかも落葉を踏みながら首をゆらして来る様は何とも愛らしい。それはおそらく誰もが目にしている景である。しかし作者はそういう些事を拾い上げて一句に仕立てている。此事の中にこそ俳句の芽は存在する。その芽を如何に

育て上げるかが大事な句作法である。

古書市にめぐり逢ふ過去秋日和

渡邊 泰子

神田の古本まつりは今も賑やかに催されているのだろうか。本好きな人にはたまらない本のお祭りだ。

作者もそういう或る日、並んでいる本の背文字を見ていると、その中にはるか昔に読んだことのある一書に気づく。「めぐり逢ふ過去」はただの驚きではない。そこには作者の若い頃の思い出が漂っている。その思い出の行方は鑑賞外だが、今は「めぐり逢ふ過去」を「秋日和」に収束させる余裕を持つ作者なのだ。

世話焼きの妻うとましや風邪籠

豊谷 青峰

風邪という病いは厄介なものだ。鼻風邪などと疎かにしていると、思わぬ大病に進むこともある。

この句、面白い句だがまた贅沢な句だ。風邪も熱のある内は用心するが、少し良くなると起き出したりする。それを咎める妻に逆に「うとましや」と思う作者。咎めることは妻の愛情の表現だが、作者にはそれが解つていて尚「世話焼き」と思う贅沢な気持もある。そういう頃には風邪も大方退散する。この句「うとましや」とあるが、夫人への感謝の句と解すべきだろう。